

永平寺「禅の里まちづくり」の活動と視点 ～地域主体のまちづくり手法に関する研究（1）～

下川 勇*

On the Activities and the Viewpoints of Eihei-ji's “ZEN-NO-SATO COMMUNITY DESIGN” ～ A Study in the Technique of the Community Design by the People of the Area (1) ～

Isamu SHIMOKAWA

This paper is a study in the technique of community design by the people of the area through the “ZEN-NO-SATO COMMUNITY DESIGN” performed in the Eihei-ji in Fukui. Although this “ZEN-NO-SATO” project constituted by the priests, the inhabitants, and the consultants is going to reform the present condition of the decrease in tourists, there is a problem which must be asked here. It is the original character of this place. While in this study we examine the method by which a project reflects the original character of this place, we try to investigate how the inhabitants approach positively to this problem in this process.

Keywords: community design, original character of place, faith, eihei-ji

1. はじめに

「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地を求めていた曹洞宗開祖道元は、寛元2年（1244年）、この言葉に相応しい深山幽谷の「越の地」に大本山永平寺を建立し、出家参禅、厳しい禅の道場をこの世界に開いた¹⁾。禅の仏法は歴代の貫首に脈々と相承護持され、やがて現代の「禅の里まちづくり」に導かれることになる。仏法とまちづくり、すなわち精神世界（もしくは道元が描いた仏法の理想世界）と世俗世界は一見して相容れない様相を呈するが、しかしながら精神世界における信仰が、人の心のあり様を問う広宣流布を修行の一環としているかぎり、開かれた信仰とその環境を創造するまちづくりとは接点をみいだせるはずである。

本研究は、そうした「禅の里まちづくり」に参画する機会をえた筆者が、以降数年はかかわるであろうその記録を残すとともに、この一大プロジェクトをひとつの例証とした地域主体のまちづくり手法を継続的に追究する、いわば実践的研究として位置づけ、その第一報としての本稿は、

* 建築学科

「禅の里まちづくり」が依るべき視点を明確化し、また、平成23年度に実施した活動について報じるものである。

ただし、ここで筆者の研究をすすめる立場を明確にしておきたい。本研究は「禅の里まちづくり」の本旨になるものではなく、むしろ客観的に反省的な立場をとるものである。また、本論において宗教思想にふれることになるが、筆者は宗教研究の教育を受けた者ではなく、あくまで建築学、特に建築論を学ぶ者として、その立場を逸脱するものではない。したがって、基本を建築論的立場とし、宗教思想については「禅の里まちづくり」に深く関わる内在的、外在的要因にかぎって触れるものとし、宗教用語については出来るだけ一般用語に置き換えて使用するものとする。また、実際のなまちづくりについては実践的立場をとることになるが、その根拠となる方法論については、基本として建築論的立場に依るものとする。

2. 永平寺「禅の里まちづくり」への参画の経緯と社会背景

平成23年秋晴れの日、一人の僧が福井工業大学を訪れられた。大本山永平寺の庶務主事であった。平成22年4月27日の深夜、大本山永平寺の象徴でもある山門前にならぶ五代杉の一本が強風により幹折れし、鐘楼堂と舍利殿の一部が倒壊するという被害に見舞われた。伝統ある伽藍の損失ではあったが、物的な損失以上に、この現象に僧たちは象徴を失った喪失感とともに、ある予兆すら感じたという。以降、境内林保全委員会を設置し、近年日本で頻発している自然災害をも想定した環境調査を行い、「永平寺の森保全計画」を策定する取り組みが進行中であるという。こうした動きのなかで、かねてより懸念されていた大本山永平寺への参拝者の減少、それに大きく関係するとされる、大本山永平寺の参道龍門より下に位置する、かつては門前譜代家来衆の生活拠点であった門前のあり方をも射程に入れた、信仰の里、心の依りどころとしての「禅の里まちづくり」構想をはじめるといふ。筆者としては事の大きさに躊躇はしたが、以降二度来学された庶務主事や門前の方々、事業をささえる企業の方々の熱心な話に心を動かされ、また学生たちに質の高い学びの場を提供できる又とない機会であることも考え、「禅の里まちづくり」への参画を承諾した。

昨今の国内のまちづくり事業は、国策として官・民・学の協働が条件となっている。これは国としての大義名分であろうが、しかしながら、まちづくりに関する地方自治体の士気を向上させるとともに、官から民へという風潮のなかで、民間が主体的にまちづくりをおこなう土壌を形成するにいたらしめた。この国策の良し悪しを問うつもりは毛頭ないが、これまで盲目的であった民間（NPO組織や有志団体）、社会貢献が求められる民間企業や大学教員を覚醒したことは事実であろう。また一方で、政府や地方行政は、そうした大きな時代の潮流を促すべく、新しくまちづくりのセクションを設けるなどして、民間の動きに対応する構造へと変化していった。

この「禅の里まちづくり」も、この社会の仕組みから漏れるものではないが、大本山永平寺の威光により、官の存在がうすめられた（ただし、後には官の役割が問われるはずであるが）、大本山永平寺と門前、民間企業、大学が協働する形式をとるにいたっている。

3. 大本山永平寺とまちづくりの視点

寛元元年、鎌倉幕府の六波羅探題波多野義重のすすめにより、道元が越前国志比に入り、寛元2年に大佛寺を建立、改称して永平寺となる²⁾。大佛寺山、剣ヶ岳、城山、吉野ヶ岳によって四方を囲われ、二本松山がその懐の深さを形成するようにあり、あたかも釈迦牟尼佛が沙羅双樹の下で瞑想に耽るときのその御手をかたどった地形の深奥に、大本山永平寺は開かれている。

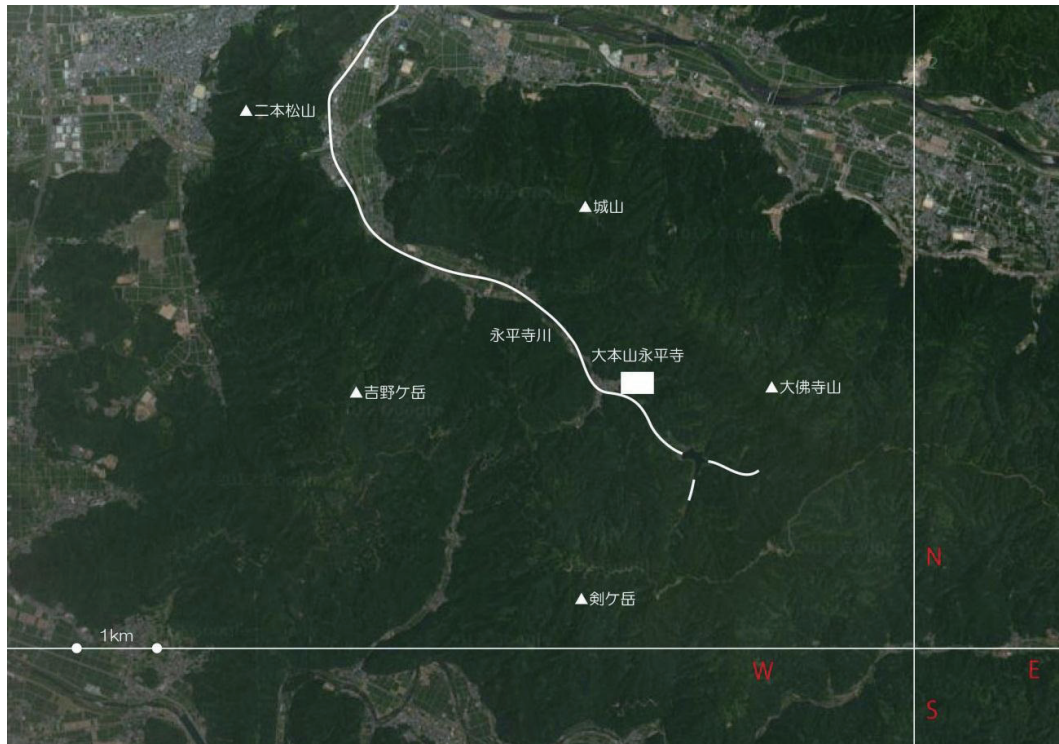


Fig.1 大本山永平寺の周辺地図 (Google map を加工)

典型的な七堂伽藍をそなえた禅宗建築の伽藍配置であり、南方から北方に向かって山門—仏殿—法堂が人体の中心をなすように直線状に配され、回廊や楼閣等の伽藍がそれらを囲んでいる。そのすべてが傾斜の深い山なみにそっている点は特徴的であり、この地を体験した者には自然と建物との調和がもたらす深山幽谷の風景が「かすかに」現前化するようである。これは「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」のこの地が、いまもなお大本山永平寺には「かすかに」存在していることを示す。ここで言う「かすかに」とは、世俗世界の諸要素が深山幽谷のこの地に深く入りこみ、いまや本来的な場所の体験ができないことを強調する言葉である。そもそもこの地には、松尾芭蕉が『奥の細道』のなかで「五十丁山に入て、永平寺を礼す。道元禅師の御寺也。邦幾千里を避て、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴きゆゑ有とかや」³⁾と述べたような、政治と宗教が乱れた都と縁をきり、深山幽谷の地に禅の道場をかまえた行為に相応しい「貴きゆゑ」が存在していたようである。しかしながら時は流れ、各地を行脚した司馬遼太郎は「ともかくも、永平寺川に沿う道路を逃げるように走って、九頭竜川に沿う本道上に出た」⁴⁾という体験をしており、もはやこの地は「貴きゆゑ」が立ち現れない場所に変り果てたと考えたようである。

今後、まちづくりを展開していく上で、不可避免的に問われることになるであろう、大本山永平寺が有する本来性について、継続的に調査・研究を実施していくことになるが、想定としてその

骨子をあげておく。

- (1) 「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地の諸条件
- (2) 「貴きゆゑ」の諸条件
- (3) 大佛寺山（自然）と伽藍（建物）が織り成す深山幽谷の風景
- (4) 自然と人（修行僧および門前衆）が織り成す禅の里の風景
- (5) 本来性を消失した時期と原因と現象

4. 門前とまちづくりの視点～司馬遼太郎の『街道をゆく』を通して～

大本山永平寺の参道龍門の下に位置する門前は、大本山永平寺を物資面から支える門前衆として、この地に居を構え、商いをし、在家として信仰をおこなっていた。大本山永平寺の真東の位置に隣接しており、四方を山に囲われ、東西の奥行き深い閉鎖的空間に建物が寄り集まっていた。現在は店舗と住居が軒をつらねており、その間に駐車場と空き地が点在している。

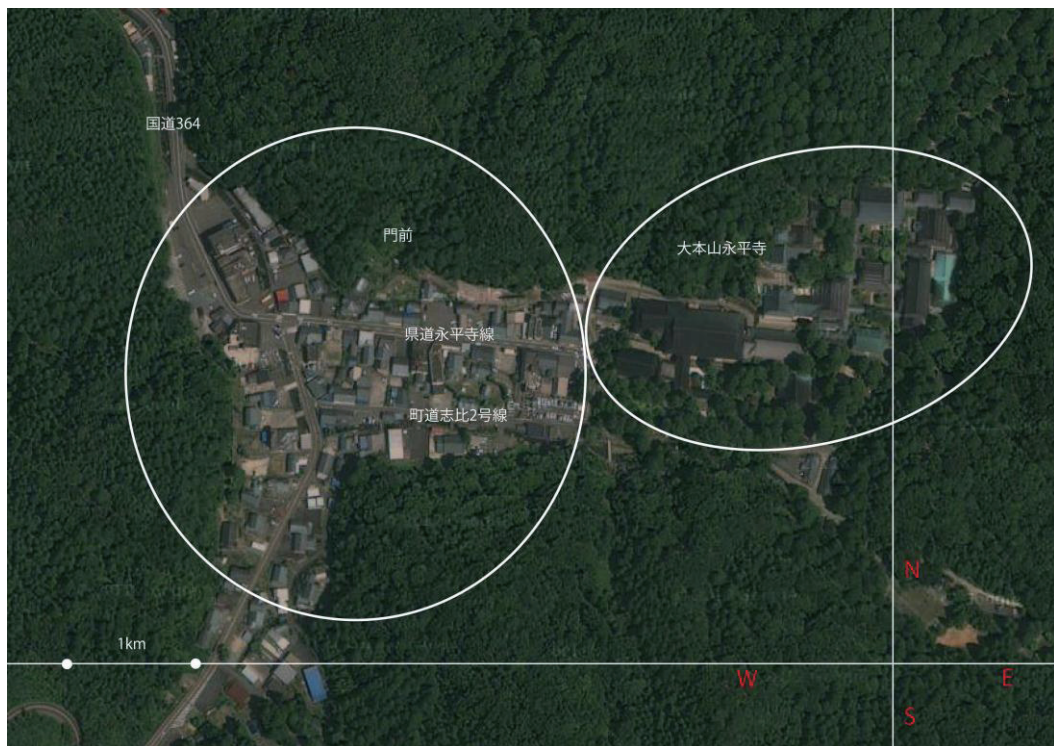


Fig.2 門前の周辺地図（Google map を加工）

時の流れによって門前の役割が変化していくことはやむを得ないが、しかしながら司馬遼太郎が門前に対して抱いた感想は、いまもなお感じ取れるものである。司馬は各地（国内外）を行脚した紀行集『街道をゆく』所収の「越前の諸道」のなかで「永平寺」の項を割いており、その冒頭で「永平寺については、当初、割愛しようとおもっていた」⁵⁾と述べている。読み進めるとただちに、本当は永平寺には足を向けたい予定であったこと、しかしながら道元に礼を尽くすために赴いた経緯が述べられており、「割愛」の理由が、この地に対する否定的なるものであったことを読みとることができる。その証拠に、この永平寺の項では道元と親鸞の教理や宗派の歴史に大半が割かれており、当時の大本山永平寺や門前については殆ど述べられていない。

司馬は昭和24年（1949年）に一度、この地を訪れている。当時は「外界からの訪客はなく、まことに雲水の道場としてよく清規がまもられている感じで、山も谷も人も清澄であるような印象であった」⁶⁾という体験をしている。「が、ちかごろは、バスによる団体観光客を誘致していて、そういう印象はないという噂をきいていた」⁷⁾と昭和55年（1980年）当時の様子を述べ、さらに道元の『正法眼蔵』を愛する地元の画伯が実は大本山永平寺に参拝したことがないという珍事を引き合いにだし、この地を訪れる価値のない場所として位置づけている。ここに前述の「割愛」の理由があるのであろう。実際、この場所に足を踏み入れた司馬は、地元の画伯とともに大本山永平寺に向かうが、「客を吐きだしたバスが多くうずくまっていて、さらにゆくと、団体客で路上も林間も鳴るようであり、おそれをなして門前から退却してしまった」⁸⁾。門前衆としては辛い話であろうが、いまなお門前にはこの現象がみられる。

ところで、司馬の当初の印象と後の印象に大きな差異があることは注目される。「外界からの訪客はなく、まことに雲水の道場としてよく清規がまもられている感じで、山も谷も人も清澄であるような印象であった」という一節には、当時の司馬が芭蕉の「貴きゆゑ」にかかわる体験をしているようである。一方の後の司馬は、大本山永平寺に入った気配もなく早々に門前を後にしており、前節で指摘したとおり、「貴きゆゑ」が失われた場所の体験をしているようである。この対照的な二つの体験は、この地への一層の不快感を司馬に抱かせているようである。

この司馬の印象は、特殊な人間の特殊な感覚であると判断されるべきではない。たしかに大本山永平寺まであと僅かのところで進むことを断念しているのであるから、特殊な事例であると受け取られようが、各地を歴訪し見聞をひろめている司馬の研ぎ澄まされた感覚は、この地にあるべき本来的な場所性の欠如がもたらす不快感を端的に示していよう。まちづくりの視点から述べると、観光客を呼ぶための措置が観光客を遠ざける行為になっていることを示していよう。また、こうした司馬の印象が視覚的要因と聴覚的要因にあることも注目されるべきである⁹⁾。

5. 「禅の里まちづくり」という概念とまちづくりの方法論

以上を受けて、「禅の里まちづくり」の手法について一考したい。大本山永平寺たらしめる「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」というこの地の本来性からみると、世俗世界の介入は許されるはずもない。しかし、仏法とまちづくり、すなわち精神世界と世俗世界は信仰の広がりとその環境を創造することにおいて接点が見出されるとも先にのべた。この背反する観念は、時代の変化を理由として柔軟に解釈されるべきであろうか。背反する観念「禅の仏法（精神世界）」と「まちづくり（世俗世界）」の関係性について少しふみ込んでみたい。

大本山永平寺蔵版『永平寺史・上巻』所収「第一章 道元禅師と永平寺の開創」の「永平寺教団の経済的基盤」に、道元が宝治2年（1248年）に記した「示庫院文」の一節が引用され、当時の永平寺では貴族、有力武士、米を用意する施主、説法（布薩説戒）に参加する人々との交流があり、これにより永平寺の維持運営がおこなわれていたことが明らかにされている。また、同書同節には「越前國吉田郡志比庄永平寺并諸塔頭靈供田目録」の一節も引用され、波多野義重

により山林や田畑が寄進され、これらが経済的基盤となっていたこと、またこうした人々は道元に、そして禅の仏法に帰依した信仰心の厚い在家信者であったことも明らかにされており、「信仰」を通じて世俗世界から身を引いている人々であったとされる。この当時の様子からは、「信仰」という行為（すなわち帰依、布施）が、仏法の精神世界と一般の世俗世界をつなぐ媒介的行為であったことを窺い知ることができるであろう。

この理解は、「禅の里」という精神世界を象徴する概念と「まちづくり」という世俗世界を象徴する概念が同居している「禅の里まちづくり」についても通じるであろうか。まちづくりの手法として最善なことは、対象となる地域の個性を見出し、それを素材として加工して世界に表現することであろう。もし、本来的には深山幽谷のこの地で、世俗的なものを素材として選び、加工して表現したならば、この地はさらに個性を失うことになるであろう。禅の仏法の精神世界を「かすかに」現前化するこの場所には、隠すことが難しいまちづくりの世俗性を「信仰」によって精神世界と結び、その世俗性を中和することが求められよう。また、世俗世界の諸々が入り込み過ぎることによって損なわれている深山幽谷の風景、禅の道場の威厳を回復する取り組みも同時に求められる必要がある。下にその手法を列挙するが、これらは場所の本来性を回復することを第一とした手法である。

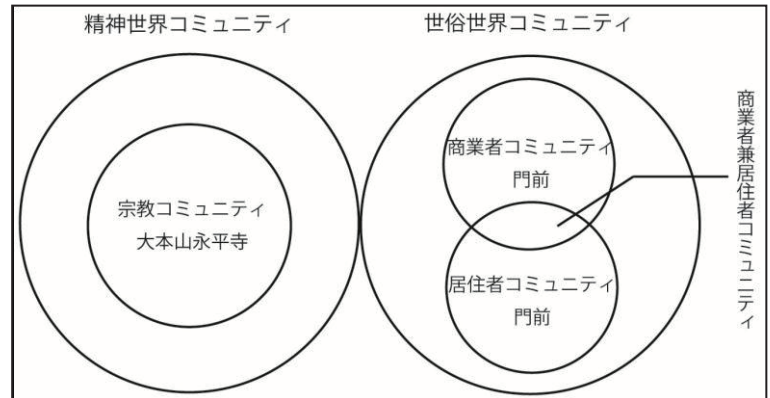
- (1) 大本山永平寺は厳しさと慈しみをもって信仰を世俗世界に開く
- (2) 世俗世界の象徴である商いの手法を信仰に照らして再構築する
- (3) 深山幽谷の風景を再生するべく門前の空間構成、景観形成を構築する

6. 「禅の里まちづくり」が対象とする地域コミュニティ

まちづくりには合意形成が不可欠である。これは再開発であれ、イベントであれ、同様である。現在、まちづくりの専門家と呼ばれる人々が、この合意形成に苦慮している。地域で生活する人々にはそれぞれの生活方法や思惑があり、これをくみ取る作業が必要になるからである。この作業をまちづくりでは地域コミュニティ形成と称する。行政が地域住民への説明会を通じて合意形成を図っていた、かつての行政主体の仕組みとは異なり、近年の合意形成は、地域住民がみずからのコミュニティを利用して合意形成をはかる、もしくは地域住民が主体的にコミュニティ形成をはかり合意形成を円滑にすすめる、このような仕組みへと変化している。後者の方法は、住民が主体的にかかわるため、長期的な持続と発展がのぞめることも特徴である。

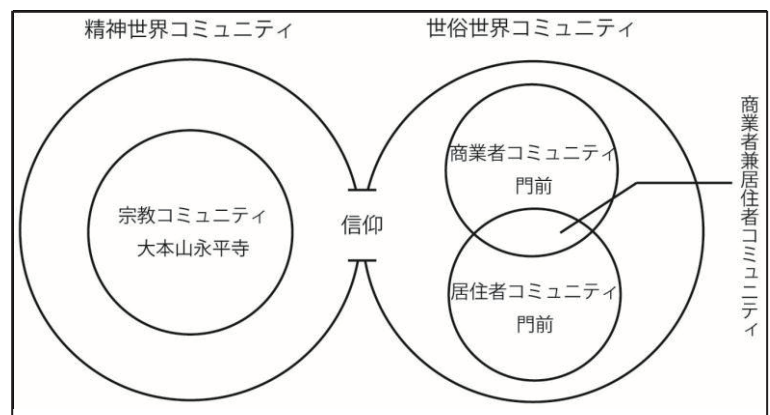
「禅の里まちづくり」では、そのコミュニティがやや複雑であることには注意が必要である。対象とする地域には「仏法の精神世界コミュニティ」と「世俗世界コミュニティ」という異界のコミュニティが存在しており、そのなかに「大本山永平寺の宗教コミュニティ」、「商業者コミュニティ」、「居住者コミュニティ」が存在している。また、商業者コミュニティと居住者コミュニティの関係を一層複雑にしていると考えられる「商業者兼居住者コミュニティ」も存在している。これが「禅の里まちづくり」が対象とする地域コミュニティである。

右の図に示すように、精神世界コミュニティに大本山永平寺の宗教コミュニティが属し、世俗世界コミュニティに門前の商業者、居住者、商業者兼居住者という3つのコミュニティが属する。おそらく、この世界コミュニティ間は時の流れに応じて接したり、離れたりを繰り返していると推察されるが、現在は実行委員会の組織が接点として機能していると言えよう。



前節のまちづくりの方法論において示した「信仰」は、このコミュニティ形成に応用できると考えられる。つまり、これまで述べてきたように、信仰が精神世界と世俗世界をつなぐ行為であるならば、二つの世界をつなぐ役割の実行委員会の組織が、第一に信仰的なものによって形成されるべきであろう。また、この図を空間として捉えた場合、二つの世界コミュニティ間に信仰という門を形成し、これによって二つの世界を行き来するイメージを形成することもできよう。

右の図は、信仰によって精神世界と世俗世界が開かれることを示すと同時に、両者の空間的領域が信仰によって開かれる関係性を示している。また、門として表現されている信仰の位置に、組織としては実行委員会が存在することになるが、空間としては聖域（精神世界コミュニティへの入口）とされている龍門の石碑が存在することも見逃してはならない。



さらに、これらのコミュニティに観光客が侵入する仕方についても、この図を用いて思考することもできよう。この地域コミュニティ形成の問題は、「禅の里まちづくり」を進める上で避けて通れぬ現実的問題である。下にこの問題に向かい合うための方法を列挙する。

- (1) 精神世界コミュニティと世俗世界コミュニティの関係性を考察する
- (2) 世俗世界内コミュニティ（商業者、居住者、商業者兼居住者）の関係性を考察する
- (3) 世俗世界コミュニティに信仰を広める範囲（階梯）、方法を検討する

7. 平成23年度の活動

以上は、建築論的立場において「禅の里まちづくり」を考察しようと試みたものである。その内容は示唆的であり、直接実践に適用されるものではないが、実践以前の関係者の視点を明確に

しようとするものであった。ここからは、平成23年度に「禅の里まちづくり」実行委員会が想定していた「学生と地域住民との意見交換会」、「学生による学内意見交換会」、実行委員会の催し「講演会とパネルディスカッション形式の意見交換会」を導くことになった基礎的活動「まち歩き」の結果について、この地の有りのままの姿を示していきたい。

なお、この活動には福井工業大学建築学科の1年生からまちづくりの経験がある4年生までの12名が参加しており、視察する対象と視点を記した資料に基づき事前打合わせを経て臨んでいる。活動の記録は学生によるものであるが、本稿においては建築論的視座によって筆者が編集を加えていることを付記しておく。

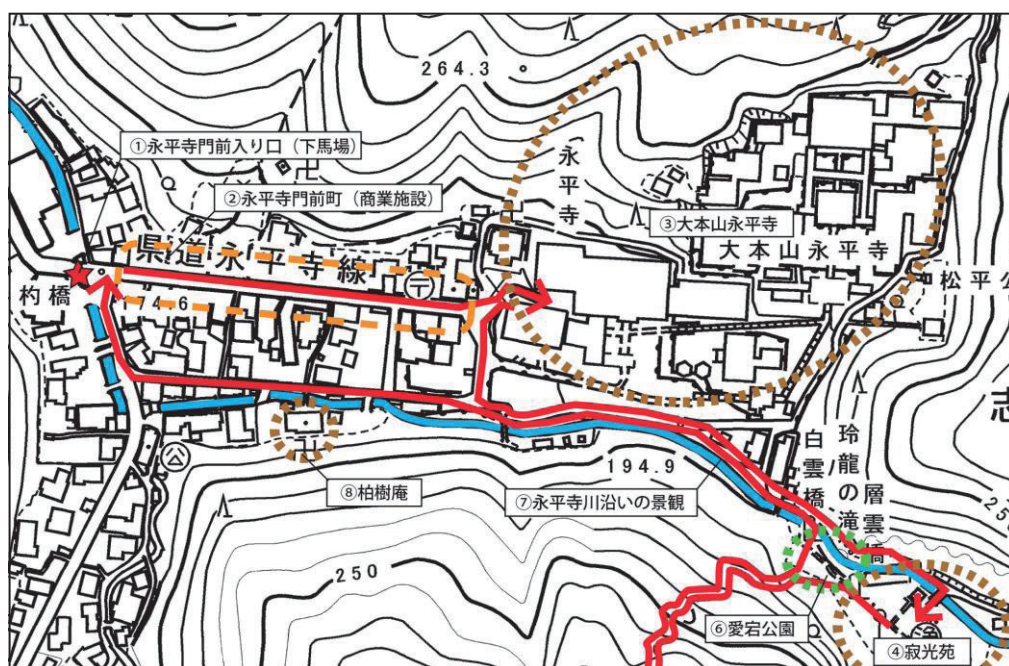


Fig.5 まち歩き map

< 県道永平寺線（表通り） >

（1）観光バスと一般車両の乗り入れの問題

県道永平寺線は大本山永平寺に向かう一般的な参道であり、商店と住居が軒をつらねている。前述の司馬遼太郎の感想は、おそらくこの通りを指していると思われる。視察時にも観光バスが次々と通行し、大本山永平寺前の龍門前に観光客を降ろし、エンジンをかけたまま待機する。龍門前は狭いので、後続の観光バスは乗客を降ろしたあと、町道志比2号線（裏通り）をくだって、広い駐車場でエンジンをかけたまま待機する。さらに、店舗併設の駐車場にも

観光バスが駐車している。ここでは常に、観光バスのエンジン音が聞こえてくる。道元が求めた「安閑無事」とは、いまや真逆の様相を呈する。また、駐車場を有する店員は個人観光客が運転する自家用車を手招きして呼び止める光景もあたり前のようにみられ、「信仰」と相対する行為で



ある印象を見る者にあたえる。

(2) 建物、空き地、道路、看板、電線の問題

平成22年度の補助事業により、一部の建物は和風の様式に修正された。そうした建物は、敷地から後退して休憩スペースを設けたり、自動販売機の色を茶系色にするなどの配慮が見られる。しかしながら、それはほんの一部であり、全体として相応しい景観であるとはいえない。また、手入が滞った点在する空き地、車両が通行しやすいように舗装しなおされたアスファルトの道路、目立たせることを優先した看板、大佛寺山の存在を視覚的に薄める電線、これら個々の要素が集合してこの地の本来性を貶めている要因となっている。「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地を再生することによって、この地のアイデンティティを確立しなければならないまちづくりとしては、ここに示している諸要素に対する景観的配慮が不可欠となる。

<町道志比2号線(裏通り)>

(1) 大佛寺山の山裾とその清流が活かされていない問題

現在は裏通りとされるこの通りは、かつては表参道であった。観光客中心の街に再構成され、その結果とり残されて裏通りに位置づけられた。せり出した大佛寺山の裾とその上流から流れる小川によって自然を感じることはできるが、利便性を優先した人の手加わり、「山林泉石ノ便宜」の地という諸条件を蔑ろにしている。ひとつに、小川は洪水を防ぐための桁の高いコンクリートによって両側をはさまれ、それが無機質な印象を与えるとともに、せっかくの清流にも手がとどかない。また山裾は、おそらく猪対策であろうグレーの金網が張りめぐられ景観を損ねている。



(2) 建物、空き地、道路、駐車場の問題

かつては表参道であったこの通りには、数十件の住居が建ちならび、いずれもかつての風情を想起させるものではない。住むことを目的として住宅を建設するのであるが、「この地で如何に住まうのか」という観点が欠如しているように見える。住宅のあいだに大小の空き地が点在しており、活用されることなく、ただ景観を損ねる要因としてのみ存在している。車両を優先的に配慮したアスファルトの道路は、本来的な役割を失い、歩行者の通行が難しい状況にある。ここにも多くの駐車場(住民用と観光客用)が点在しており、あちこちに駐車された色とりどりの車両が、統一感を損ねる大きな要因になっている。ひとつひとつの問題も大きいですが、これら諸要素が集まって自然の存在を



薄めるような全体的な景観を形成しているといえる。

＜寂光苑への静寂な散策路＞

大本山永平寺の南東に位置する寂光苑にいたる散策路は、境内以外で唯一、美しい自然をのこしている。山なみに蛇行する石畳にそって大佛寺山を緩やかにのぼる途中には、大本山永平寺ゆかりの磨崖仏、石塔や石碑が配されており、この地の歴史とともに深山幽谷の雰囲気を感じることができる。清流をはさむ土手には苔の生えた自然な姿の岩が存在感を示し、人工的な印象はいっさい与えない。色とりど



りの葉、濃い色の幹と岩、清流の白い泡とせせらぎ、鳥の声、土の匂い、そして曇天、これら諸要素が一体として「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地となるのであろうか。ただ一点、この通り沿いに設置されている看板等の工作物が景観をそこねる要因となっていることを付記しておく。

8. 禅の里まちづくりの全体像と取り組むべき視点

「禅の里まちづくり」が射程とするのは、大佛寺山の環境保全ならびに大本山永平寺と門前による観光客の誘致をふまえた地域主体のまちづくりである。この全体を個々の考察と実践を通じて究明しようとする本研究の第一報、すなわち本稿において示してきたことは、「禅の里まちづくり」が基本とするべき視点の明確化、そしてその視点を確立するための考察対象の抽出であったといえよう。この論点は、まちづくり手法のみならず環境保全の方法にも底流する基本的なものと考えられるが、すべては「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地の再生あるいは再設定を目指すという、「場所の本来性の回復」を第一の目的とするものであった。以下に改めてその視点を示すことによって纏めとしたい。

＜大本山永平寺が有する本来性を明らかにする考察対象＞

- (1) 「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地の諸条件
- (2) 「貴きゆゑ」の諸条件
- (3) 大佛寺山（自然）と伽藍（建物）が織り成す深山幽谷の風景
- (4) 自然と人（修行僧および門前衆）が織り成す禅の里の風景
- (5) 本来性を消失した時期と原因と現象

＜門前に関する考察対象＞

これは大本山永平寺が有する本来性が明らかにされた後に抽出される。いまのところ司馬遼太郎が示す視覚的要因と聴覚的要因を門前の問題として設定することはできよう。

＜「信仰」を基本としたまちづくり手法に関する視点＞

- (1) 大本山永平寺は厳しさと慈しみをもって信仰を世俗世界に開く

- (2) 世俗世界の象徴である商いの手法を信仰に照らして再構築する
- (3) 深山幽谷の風景を再生するべく門前の空間構成、景観形成を構築する

＜コミュニティ形成をはかる際の考察対象＞

- (1) 精神世界コミュニティと世俗世界コミュニティの関係性を考察する
- (2) 世俗世界内コミュニティ（商業者、居住者、商業者兼居住者）の関係性を考察する
- (3) 世俗世界コミュニティに信仰を広める範囲（階梯）、方法を検討する

註

- 1) 道元が中国（宋）の如浄（1163-1228年）の教えに則するために「安閑無事」の「山林泉石ノ便宜」の地を求めていたことは、永平寺史編纂委員会、『永平寺史』上巻、昭和57年、79頁による。同書では、これを道元の本意とするが、直接的動機は寛元元年（1243年）における興聖寺「破却（焼打ち）」による差し迫った事情にあるとし、しかしながら、「越の地」を所有していた波多野義重らの要請、如浄の教えに「越の地」が見合っていたことなどの複合的な理由によるとする。
- 2) 同書、68～71頁、93～110頁
- 3) 井本農一校注・訳『芭蕉文集 去来抄』、完訳日本の古典55、小学館、1985年、84頁
- 4) 司馬遼太郎『街道をゆく18―越前の諸道』、朝日新聞出版、2008年、160頁
- 5) 同書、149頁
- 6) 同書、159頁
- 7) 同書同頁
- 8) 同書同頁
- 9) 司馬が2回目の訪問時に抱いた門前の印象は昭和55年頃のものである。これより以前、昭和42年に前川幸雄（元福井大学地域科学部教授）が大本山永平寺と門前の様子について記録しており、両者の印象を比較することによって、門前の変遷を確認することもできるであろう。前川の記録を挙げておくこととする。前川幸雄著「新緑の永平寺―永平寺川の周辺―」、新文明所収、第17巻、第7号、昭和42年

謝辞

本論文の執筆にあたり査読および助言を頂いた大本山永平寺布教部部長 西田正法氏、同寺専門委員 原田光則氏、同寺尚事 小林昌道氏に感謝の意を表する。また、本研究の実施にあたり多くの貴重な蔵本をご寄贈いただいた大本山永平寺に深謝する。

(平成24年3月31日受理)